

## 藤原菅根(上)

寛平・延喜期の文人の周辺

工藤重矩

(一九七七年九月九日受理)

## 一

江村北海の「日本詩史」(明和八年刊)は、藤原菅根(856-908)を評して「参議菅根、才子の誉あり。嘗て菅公の薦引を被る。後に左相に阿附して菅公を傾く。其の人は固より卑し。『秋を惜んで残菊を翫ぶ』の七律、殊に雅馴ならず」という。詩の評はさて置いて、人物評は甚だ厳しいのだが、これは北海個人の判断というよりは、当時の、そして今に及ぶ、共通の理解というべきであろう。

天神説話において、菅根は、道真の左遷を諫止すべく参内した宇多法皇の仰せを伝奏せず握り潰してしまった悪役である。これも江戸時代の読みもの「百人一首一夕話」(天保四年刊)には「(法皇)清涼殿に近づかせ給ひてかくと申せと仰せられけれど、菅根朝臣藏人頭にてありけるが、昔殿上の庚申の夜の御遊につらを打たれ参らせたる恨み深くて、この旨を奏し申さざりければ、法皇は世の中あぢきなく恨めしく思召して、大庭の棕の木のもとに立ちやすらひ給ひて、夕日の山の端にかたぶく頃空しく還御ならせ給へり」と、菅根の小

人ぶりを伝えている。「一夕話」のこの話は、「北野縁起」などの類を種本としているらしく、やや早くは、「江談抄」にも見える有名なエピソードである。このようなエピソードに拠って北海の菅根評もなされているであろう。むしろ、この逸話によって僅かに菅根の名は一般に知られると言ってよいのかもしれない。

このような菅根をここに取り上げるのは、実際の菅根は、天神説話の趣とはやや異って、生前に既に「学に篤く、経史百家畢く諳ぬ」(三代実録)と称され、起家でありながら文章博士に補せられ、式部大輔を歴任し、「延喜式」「延喜格」の編纂に参画し、醍醐天皇の東宮時代以来の侍読であり、没後、橘広相の先例に従って従三位を追贈された、「篤学」というに足る人物であって、寛平・延喜期の文壇を窺う時、名を逸すことのできない者の一人と考えるからである。

しかも、「日本詩史」にも言う如く、道真との関係も一通りでない。若い頃、菅家廊下に学んだと察せられるのだが、道真左遷には時平側に立って動いた。そしてその数年の後、今度は宇多法皇の院司となった。そのやや奇異にも見える動静をたどることで、当時の文人

社会の複雑な一面と、その中に生きる文人官僚の交遊の具体的な様相を窺うことができればと思う。(上)では主として道真との関係について述べ、(下)においては時平・法皇との交渉についてのべる。

## 二

## 1 道真の薦引

寛平九(897)年七月三日醍醐天皇が即位し、それに伴って十三日叙位儀があつて、藤原菅根は従五位下に昇叙せられた。四十三歳<sup>(5)</sup>。これに先立って、道真は「特に従五位上を大内記正六位上藤原朝臣菅根に授けたまはむことを請ふ状」を奏上している。「菅家文章」<sup>(6)</sup>巻九に収められる奏状は次の如くである。

右臣某、謹尋<sup>ニ</sup>事意<sup>一</sup>、去寛平五年四月二日東宮之始、太上天皇勅<sup>レ</sup>臣曰、此般東宮每<sup>ニ</sup>事省略<sup>一</sup>、依<sup>ニ</sup>二員<sup>一</sup>学士、闕而不<sup>レ</sup>補、汝已<sup>ニ</sup>任<sup>一</sup>亮、兼<sup>ニ</sup>供<sup>一</sup>執經云々、臣須<sup>ニ</sup>伏<sup>一</sup>奉<sup>ニ</sup>綸旨<sup>一</sup>、一身兩<sup>ニ</sup>役<sup>一</sup>、而所<sup>ニ</sup>守<sup>一</sup>念劇、遂<sup>ニ</sup>違<sup>一</sup>勅命、爰<sup>ニ</sup>至<sup>一</sup>于十月、以下臣不<sup>レ</sup>違<sup>ニ</sup>執經<sup>一</sup>之状奉聞太上天皇、即<sup>ニ</sup>奉<sup>一</sup>件菅根、令<sup>レ</sup>聽<sup>ニ</sup>昇殿<sup>一</sup>、菅根、晝夜恪勤、上日明<sup>ニ</sup>日<sup>一</sup>、每<sup>ニ</sup>當<sup>一</sup>顧問、應對無<sup>レ</sup>私、縱容之次、宿侍之間、引<sup>ニ</sup>經<sup>一</sup>伝<sup>ニ</sup>以<sup>一</sup>發<sup>ニ</sup>叙情<sup>一</sup>、抽<sup>ニ</sup>章句<sup>一</sup>以<sup>ニ</sup>催<sup>一</sup>文思、其所<sup>ニ</sup>奉<sup>一</sup>授者、曲礼・論語・後漢書等、秩卷有<sup>レ</sup>餘、以<sup>レ</sup>口奉習<sup>ニ</sup>之類<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>計、加以菅根、对策及第之後、七箇<sup>ニ</sup>年<sup>一</sup>于今也、准<sup>ニ</sup>之前例<sup>一</sup>、謂<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>晚成<sup>一</sup>、況<sup>ニ</sup>年<sup>一</sup>四十三、多<sup>ニ</sup>後<sup>一</sup>等輩、伏願

特蒙<sup>ニ</sup>天鑒<sup>一</sup>、叙<sup>ニ</sup>之上階<sup>一</sup>、一補<sup>ニ</sup>成業之旧功<sup>一</sup>、一明<sup>ニ</sup>侍読之新賞<sup>一</sup>、臣某、頓首々々誠惶誠恐、謹言

寛平九年七月日

正三位權大納言兼行右近衛大将菅原

前半は菅根が東宮侍読となつた経緯を、後半はその勤務ぶりや昇進の遅延とを訴えて、「上階」つまり従五位上に叙せられんことを請うている。菅根が七月十三日に叙せられたのは従五位下であつたから、この奏状の効果は実は無かつたことになる。坊官は即位時に昇叙されるのが例であるから、従五位下は道真の奏状がなくとも叙せられていたであらう。道真の奏状は二階級の特進を訴えて、許されなかつたのである。その意味では、奏状は無効であつたが、道真の菅根に対する薦引を示すものであることには変りない。

述べられている内容の検討は後に譲つて、まずいかにして菅根が東宮侍読について道真の推挙を得ることができたのか、そのことを菅根の経歴を遡つて考えることから始めよう。

侍読として推挙されるためには、何よりも侍読に堪えうる学問が備つていなければならぬまい。菅根の秀才をまず確かめよう。

菅根は元慶八(884)年春文章生に及第した(公)<sup>(8)</sup>。試の詩題は「龍図授義」であり(古)、題者は道真、判者は橘広相である。<sup>(9)</sup>同時に、矢田部名実ら十名が及第している。<sup>(10)</sup>

「菅家文章」(巻二)にはこの時の十名の及第者を賀す詩十篇があ

り、その一篇に「賀右生」なる詩がある。右生は菅根の学生としての字である(公)。その詩は次の通りである。

一経不用満<sup>レ</sup>贏<sup>レ</sup>金 一経用<sup>ル</sup>ず贏<sup>ニ</sup>に満<sup>ニ</sup>つる金

況復螢光草逢深 いはむや螢の光の草の逢に深からむや

業是文章家将相 業は是れ文章家は将相

朱衣向上任君心 朱衣向上君が心に任さむ

(訓は「古典大系」による)

一経不用<sup>レ</sup>満<sup>レ</sup>贏<sup>レ</sup>金。この句は「漢書」韋賢伝の「子に黄金の贏に満てるを遺すは一経に如かず」に拠るといふ(古典大系補注)。とすれば、菅根には一経が遺されていたことになる。まず学問的環境があつた。それに加えて、螢雪の故事の如くに勉学に励んだ。菅根が螢雪の功を積んだことは、後に引く父良尚の卒伝に付け加えられた「長子菅根、篤<sup>ニ</sup>学<sup>ニ</sup>、経史百家畢<sup>ニ</sup>談<sup>ニ</sup>」という文章から察せられるところである。

業文章は、文章道に学んだことを言う。家将相は、「史記」孟嘗君伝の「将門には必ず将有り、相門には必ず相有り」などを踏まえた表現。菅根の家は将相の家、必ずや菅根も將軍宰相に至るであろう。朱衣の五位はもとより、学問への努力と将相の家柄が備るからには、并進は菅根の心のままであろうと、道眞の賀詩はいふ。

賀詩は前途洋々たることを言うようであるが、「文章」を業とする者にとって、「将相」の家であることは必ずしもそのまゝ有利な条件ではない。将相の家の菅根は、文章道に於ては必然的に起家である。

文章と将相は本来異質である。その点で、この詩の起句で、一経云々とあたかも学問の家であるかのように言うのは、家は将相の一句とやや矛盾している。にもかかわらず、なぜ道眞は一経云々と言うのか。菅根の家は一体将相の家なのか、一経を残す学問的家なのか、ここで菅根の家系の検討をしなければならぬ。

## 2 菅根の家系

「尊卑分脈」に拠つて系図を掲げれば、次のページの通りである。良尚の子には、系図に遺漏があるようで、後にも引用する「朝野群載」所収の、寛平二年の興福寺施入帳によれば、良尚の子として、敏樹、基風、房員(貞イ)、顯相、眞(貞イ)興、そして菅根の六人の名が見える。當幹、真能守の名が無いのは幼年の爲と考えれば、「分脈」には顯相と當幹との間に三人の名が欠けていることになる。また「或本云、已上四人菅根子也」の注も誤りと断定してよい。

良尚は「三代実録」元慶元(877)年三月十日条の卒伝によれば、その人柄は「美<sup>ニ</sup>姿容<sup>ニ</sup>、好<sup>ニ</sup>武芸<sup>ニ</sup>、膂力過<sup>ル</sup>人、甚<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>膽氣<sup>ニ</sup>」とあり、官は嘉祥三(850)年に「起<sup>ニ</sup>家<sup>ニ</sup>、為<sup>ニ</sup>右近衛権将監<sup>ニ</sup>」てよりのち、右少将、上総介、左少将、左中将を経て、貞観十七(875)年従四位上、右兵衛督となり、元慶元年卒した。六十歳。

良尚は卒伝によれば、武人であるらしく、学問とは縁遠い。母は塞長坂上盛の娘で、父春繼は常陸介からそのまま東国に土着したらしい(後述)ので、若い頃の良尚は弓馬のことに明け暮れたにちがい

(南家)武智磨

從三、式部卿、參議  
巨勢磨  
并 因幡守、周防守、從四下  
母山背上女、弘仁元年

春繼  
中務大山、常陸介、從五上  
母縣大養女

良尚  
右兵衛、左衛門督、從四上  
母常陸大目取上盛女  
貞觀十九年

(注)  
菅根

菅根  
母從五上菅野高年女  
陸奥守、延佐、從四上

真興  
母伊予權守秋緒女  
伊予權守、但馬、近江、越後、正五下

顯相  
母滋野氏、延喜廿三正卒  
參議、治部卿、大貳、播磨守、延佐、從三、本一雄

當幹  
母同菅根、大應四十一、四歲  
伊賀守、從五下、一本云其信守

真能守  
母同顯相、延長元年、已上四人菅根子也云々

李方  
右馬頭、從四上  
母  
大納言、民部卿、正三位  
元方  
母石見守從五下氏江女  
延喜更衣  
女子  
母同

(菅根の注)

延喜侍議、才人哥人  
式部大輔、從四上  
侍從、左少將、左中弁  
文章博士、大内記、少納言  
參議、勘解由次官、東宮大夫

なく、嘉祥三年には三十三歳であつた。その官も武官が主で、良尚の家には學問上の便宜はほとんど無かつたであらう。

祖父春繼の経歴は国史にも見えず、僅かに「分脈」によつて「中務大輔、常陸介」を知りうるが、この他に「朝野群載」卷十七には、菅根等兄弟が上総国藻原庄等を興福寺に施入した時の施入文が収載され、良尚・春繼のことがみえる。

(上略)就中、藻原庄、曾祖父故從四位上黒麻呂朝臣之牧也、墾闢為治田也、田代庄始自曾祖父至于祖父故從五位下春繼朝臣、其間往々買得以為私業也、先考故從四位上良尚朝臣相承管領也、菅根等、先人生平被過庭之訓云、「件兩箇庄、先君(注一春繼)有命、可施入興福寺云、昔先君於此藻原庄寢居、即遺命云、「病深膏肓、命迫旦暮、

若有不諱、葬此庄中、汝生時我無慮、若其後、子孫非其人、輒為他人之地、恐令牛羊踐我墳墓、須汝世即施入興福寺者、仍隨遺命葬件庄中、今我命録頗叶、得免飢寒、須隨先君本意施入彼寺、比作此念不意遷化、今菅根等、敬隨祖考之命施入件等庄田、(下略)

右により、春繼は常陸介の任果てて後、上総國に土着して彼の地に没したと知れる。良尚の官歴の最初に「家起」とあるのは、良尚は父の没後、再び京に還つて中央貴族の道を選びなしたことによるのであらう。その良尚にとつては東國の庄園は経済的に大きな支えであり、父春繼の遺命とはいえ、施入を一日延ばしに延ばしていたのであらう。

良尚の出身が右の如くであれば、やはり良尚の家は一経を遺す環境ではないであろう。

一方、母は菅野高年女である(公)。菅根は斉衡二(855)年の生れであるので、良尚が右少将の時、三十八歳の時の子である。どのようないきさつかは不詳である。

菅野氏は百済王系帰化人の後で、津氏・葛井氏・船氏はその同系の氏である。<sup>(12)</sup>菅野氏は平安時代初期には多くの学者を出している。真道・佐世・惟肖などはやや名のある学者であり、菅根の舅の高年もまたその一人である。おそらく、学問上の便宜は多く母方の菅野氏から得たことであろう。

高年の経歴はよくは判らないが、「続日本後紀」によれば、承和十二(845)年正月從五位下、同十三年五月造酒正、同年七月図書頭、同十四年二月内匠頭、嘉祥二(849)年正月因幡介とあるが、以後は不明である。学問的な面では、承和十(843)年六月一日から内史局で日本紀を講じている。<sup>(13)</sup>後年、延喜四年の日本紀講書に、菅根は特に召されて講席に列しているが、それは高年の講書と無関係ではないであろう。

ところで、菅野朝臣は、津・葛井・船氏に対して度々改姓を許されている姓なので、高年がどの系統に属するか検討しておこう。

菅根の同母弟當幹は、「公卿補任」(天慶四年)によれば、晩年、病を「八坂東院」に養っている。「続日本後紀」承和四年二月廿七日条によれば、菅野真道の建立した八坂郷の道場が現在は八坂寺の別院

の如くになっているので、これを八坂寺から分離して一院となし、僧一人を置くことを、真道の息男永岑が請うて許されている。この院を人々は「八坂東院」と呼んでいたという。であれば、當幹は母菅野高年娘の縁で八坂東院に住んだのであり、高年女は真道の系統か、それに極く近い者であったと推定される。

真道は、初め津の連を賜ったが、延暦九年に連を朝臣に改めることを請うて許され、同時に菅野の姓を賜った。主な官歴は、少内記、東宮学士、図書頭、伊与守、治部、民部大輔、左兵衛督、左大弁を経て延暦二十四(805)年参議となり(65才)、弘仁二(811)年致仕し、五年六月二十九日薨じた(74才)。從三位である(以上公卿補任)。「日本後紀」弘仁二年正月丙辰条に致仕の表が収められている。

真道の学者としての主な業績は、「続日本紀」「延暦交替式」の編纂に参与したことである。<sup>(15)</sup>真道が国史関係のことに堪能であり、高年が真道の系統とすれば、高年の承和の日本紀講書はまことに適任であり、「知古事者」という「続日本後紀」の表現も、真道の国史編纂を念頭に置いていることかもしれない。更に後年、菅根が「延喜式」「延喜格」の編纂に関わることになるが、菅野氏を通して得た知識が役立ったのではなからうか。菅根が「史記」を始めとする史学の方面に長じていることも、菅野氏の専門領域と重なることとして、菅野氏の影響を考えてよいことかもしれない。

以上の如くに菅根の家系を見て来て、再び道真の「賀右生」の詩の「一経は用ゐず贏に満つる金」の句を考えれば、道真はこの時、

父方ではなく、母方菅野氏の学問的環境を念頭に置いていたのだと言えよう。母方の学問と父方の家柄、この二つが備っていることを道真は言うのであろう。

### 3 菅家廊下

菅根が菅野氏の影響下に勉学に励んだらしいことは分ったが、はたして菅家廊下に学んだのであろうか。つまり「賀右生」の詩が、廊下の門生であつたことによつて作られたと考えてよいかどうか。

「古典大系」の作詩年表では、元慶八年の項に「菅家廊下の諸進士十人及第する」とあつて、菅根等を廊下の学生と見ている。年表とこのことで、理由は示されていないので、ここで少し検討を加える。

十名の進士とは、丹誼、和平、橘風、中義、野達、田絃（矢田部名実）、多信（多治敏範）、和明、右生（藤原菅根）、橘木（橘公廉）である。<sup>(19)</sup>

賀詩を詠じた理由を、まず道真と同曹の縁と考えてみよう。そう考へて、十名を曹別に分けると、右生は巨勢麿流なので東曹、橘風・橘木は橘氏なので西曹、田絃が矢田部氏であれば東曹、藤原氏は西曹である。平安中期以降の資料に拠る氏族家系別の分類が、遡つて元慶の頃に適用しうるかどうか、やや疑問であるが、同曹の者のみを賀したのではないと考えてよいであらう。それでは、廊下の学生の故と考えてよいであらうか。

「菅家文章」には、文章生・学生に係する詩篇が散見するが、それらを通じて言えるのは、その文章生なり学生なりが、どうやら

道真と特別の関係、廊下の門生であるとか同曹の出身であるとかにあるらしいことである。次の詩はその確かな例である。

#### 189 途中遇中進士

適逢<sup>タツトウ</sup>知友<sup>チユウ</sup>立<sup>タツ</sup>中途<sup>チュチュ</sup>

便謝<sup>ベンゼン</sup>諸生<sup>シュウセイ</sup>怨<sup>ムス</sup>旧儒<sup>キウニョ</sup>

補逸<sup>ホイツ</sup>書篇<sup>ショヘン</sup>三百字

不知<sup>シラズ</sup>詎<sup>ナラ</sup>得<sup>エ</sup>一明珠<sup>イツミョウジュ</sup>

この詩は、仁和（二八八）年讃岐守赴任途中の作とされている。道真は、中進士を知友と呼び、春試での道真の援助を期待していた「諸生」の失望・怨みを、中進士を介して慰撫しようとしている。道真の援助を期待するからには「諸生」は廊下の学生であらう。その学生を慰撫するからには「中進士」も廊下の先輩なのであろう。

この「中進士」について、古典大系補注は中臣某であらうとされるが、「中」が中臣であるかどうかは不明だが、「中」の文字を持つ進士が、件の十名の中にいた。「中義」である。元慶八（八八）年と仁和二（八八）年は二年を隔てるのみである。「中進士」と「中義」とが同一人である可能性は大きいであらう。もし同一人であれば、十名の中の一人は廊下の学生であつたことが判明する。

進士及第を賀す詩としては、文室時実を賀した「聞文進士及第、題客舍壁」<sup>(21)</sup>がある。この詩の第五句には「三千門下独り留守すらくのみ」とあり、多くの門下のうち、時実のみ忠実に道真の留守をまもったの意（古典大系頭注）であるから、時実も明らかに道真の門下生である。

また貞観十三年、道真が対策に及第した時、船進士も進士に及第した。それを賀した「冬日賀船進士登科、兼感流年」(57)にも「君が功と我が業と先づ成りにし後、恨みず三冬景斜なりやすきこと」など、同門の意識に依る表現であろう。貞観十三年といえは、是善生存中であり、船進士(御船弘方か)は是善の門下であろう。

以下、用例は省くが、「諸生」などに関する詩は、道真との特別な関係を前提として詠まれているようで、十名の「賀諸進士及第」の詩も、単に及第者だからというのではないと考えてよからう。では全員菅家廊下の門生かといえは、その確証もない。そのうえ、疑問は、文章生の定員は二十名で、欠員が生ずるに従ってこれを補うのであるが、同時に十名の及第といふのは多数であり、十名がその時の及第者の全員なのかもしれないことである。<sup>(23)</sup>であれば、全員の中の一人ということになるが、廊下出身者が諸司に半ばする勢であったことを考えれば、全員が廊下の門生という事態もありえよう。しかしまた一つの問題は、この試の題者が道真であったことである。試の題者であったという理由で賀詩を作ったという可能性もあるかもしれない。

いくつか疑問は残るのだが、十名の中義が門生らしいこと、賀詩を詠ずるには特別な関係を前提とするらしいことなど考えて、十名は菅家廊下の門生であろうと思う。菅根についていへば、後年の道真の推挽などと考え併せて、廊下の門生であったと判断する。

#### 4 対策及第

文章生に及第してより六年後の寛平二(890)年秋対策して及第した。「公卿補任」に九月十三日といふのは及第の日であろう。三五歳である。策問の題、判者等は未詳。元慶八年同時に文章生となった矢田部名実がまた同時に及第している(古今集目録)。

菅根の家は累代の儒家ではない。所謂「起家」である。起家の場合には、進士となつてのち、文章生外国(掾)に任じ、方略の宣旨を蒙つて策に応ずるのが例であるという。『上代学制の研究』にも引用されている「朝野群載」卷十三の「請准拠旧例被下宣旨以正六位上行因幡大掾大江朝臣通国令奉方略试状」に、「起家献冊之輩」の例として「貞観菅野惟肖、滋野良幹、寛平参議菅根朝臣、矢田部名実、三統理平」などの名が挙げられている。事実菅根は寛平二年正月因幡掾に任ぜられている(公)。因幡は文章生外国の任国たる山陰道であるから、この掾は文章生外国としての任であろう。<sup>(24)</sup>

さて、問頭博士が誰であるかは未詳であるが、範囲はいくらか限定できる。問頭博士には、式部省のしかるべき儒者があたるが、寛平二年の式部大輔は平惟範、<sup>(26)</sup>少輔は未詳、大丞二人のうちの一人は藤原某である。<sup>(27)</sup>また菅根が東曹の出身であれば、博士は西曹である。この条件に適う者の特定はやや困難である。

こうして菅根は、起家ながらも儒者の道を確実に昇っていく。官も寛平三年三月九日少内記に任ぜられ(対策及第によるのであろう)、同

六年正月十三日には大内記に転じた。大内記は「儒門之中堪<sub>ニ</sub>文筆<sub>一</sub>者任<sub>レ</sub>之」(職原鈔)とされる官である。大内記に転ずる三箇月前の五年十月に、道真の推挙を得て東宮の侍読となるのである。

菅根の家系を遡り、勉学の跡をたどって、再び道真の奏状を検討すべき所に戻ってきた。これまでの調べに依って、菅根の学才が十分に侍読の任に堪えうるものであり、かつ道真と菅根の關係がどうやら菅家廊下における師弟のそれであるらしいということが判った。ただ、師弟關係の深さの程度がなお不明確であり、廊下の門生にしてかつ学才を備えていたであろう者の中で、何故に菅根を選び出して推挙したかとなると、なお明らかになつたとは言いがたい。

道真の後任とはいえ、道真の一存で東宮侍読を決めうることはなからう。東宮大夫時平の意向も無視できないであらうし、天皇の考えもあらう。東宮学士が欠員となれば、実質的には東宮<sup>(28)</sup>学士である。学士に準ずるとなれば、学士選考上の条件も多少は考慮されるであらう。さまざまな要素を考慮すれば、ただひたすら道真の推挽のみで侍読になりえたという訳でもないであらう。と考えてもなお道真の推挽なしには実現しなかつたであらうことも疑いえないことで、東宮侍読のことにおける道真の推挙の効は大であつたであらう。菅根の感謝する所も大きかつたと思像される。

## 5 東宮侍読

東宮に昇殿した菅根の身分は東宮藏人であつたかと推定される。

「古今集目錄」所引の「藏人補任」には「寛平九年七月七日昇殿<sub>故藏人</sub>とある。故<sub>モト</sub>ノ藏人<sup>(29)</sup>」ということと昇殿したのである。同日兼輔も「元春宮殿上」ということで昇殿している(公)。菅根と同じ扱いである。右に従えば、菅根は東宮藏人である。

東宮に於る勤務態度を道真の奏状に依って見よう。そもそもこの奏状は昇叙を請うのだから、美点を列挙するのは当然として、その美点の記し方は「考課令<sup>(30)</sup>」の条文を意識してなされている。

菅根、昼夜に恪勤<sup>かしん</sup>し、上日は日を明らかにす。顧問に當る毎に対応は私無し。

「恪勤」は「考課令」に「恪勤<sup>こつしん</sup> 匪<sup>ひ</sup>懈<sup>けい</sup>者、為<sup>な</sup>ニ善<sup>ぜん</sup>」とあつて、「一善」と考定される条件である。「善」は、三善で上、下、二善で中、上の如くに考校する。「令義解」は「恪勤」を説明して「恪敬也。盡<sup>ことごと</sup>力<sup>りき</sup>曰<sup>いは</sup>恪。仮如<sup>かりごと</sup>、馮<sup>ほう</sup>豹<sup>ひょう</sup>奏<sup>そう</sup>事、通宵伏<sup>ふく</sup>閣。巫馬<sup>うま</sup>從<sup>したが</sup>政、戴<sup>たい</sup>星<sup>せい</sup>居<sup>い</sup>官之類、恪勤也」という。

「恪勤」という語を用いていること、「考課令」を意識していることの現れであらう。また「昼夜恪勤」は「通宵伏閣」「戴星居官」とも通ずる表現でもある。

「上日」も考課の用語である。考課の対象となる為には、一定以上の上日(出仕日)が必要である。「考課令」によれば「凡内外、初位以上、長上官、計考、前<sup>まへ</sup>釐<sup>りん</sup>事、不<sup>ふ</sup>滿<sup>まん</sup>二百冊日<sup>にふひ</sup>、分番不<sup>ふ</sup>滿<sup>まん</sup>二百冊日<sup>にふひ</sup>、若<sup>も</sup>、帳内資人不<sup>ふ</sup>滿<sup>まん</sup>二百日<sup>にふひ</sup>、並不<sup>ふ</sup>考<sup>こう</sup>」ともあつて、上日数は考課の重要な要件である。



「上日明<sup>ヨルハ</sup>」日<sup>ヒ</sup>は、出仕日は判然と日が解る——上日数は十分に満たしていることは明白という意であろう。

「応対無私」の一句も「令」の「公平可称者、為一善」に適うであろう。「令義解」は「背私<sup>セシ</sup>為公、用心平直中略公平也」という。

「背私」などを意識した措辞であろう。

以上の如くに、菅根の勤務態度を述べる部分は「考課令」の条文を踏まえた表現であると判断される。勿論、此の度の叙位は、即位に伴う坊官としてのそれで、「考課令」に拠って功過を考校した上で叙したというものではないであろうが、昇叙を請う奏状であつてみれば、「考課令」を意識せざるをえないのであろう。

「昼夜恪勤」とか「対応無私」とかの句が右の如きものであれば、「恪勤」「無私」の語からだちに、菅根は真面目で平直な人柄であつたとはできない。多少とも誇張はあろうからである。とはいえ、恪勤しているかどうかは、上日の記録も備わつていたのであろうし、「無私」というのも、奏状は天皇に奉るのであり、菅根の顧問の相手はその天皇（皇太子）だったのだから、「無私」の実態は知られているのであり、あまりな誇張は却つて逆効果だろう。とすれば、菅根はまずはまじめな侍読であつたと推定して大過ないであらう。

菅根の教授した書は「曲礼」「論語」「後漢書」等とある。「章句を抽きて以て文思を催す」と文学的な面でも教授するところがあつたらしいが、主たるものは経史の分野である。幼少の皇太子（寛平五年八才）であるから、儒学の基本的なテキストを教授するのは当然とし

て、そのこと以外に、詩文のことは依然として道真の担当する所であつたらしい。

道真は執経の役を菅根に譲つたが、東宮亮（寛平七年十一月権大夫）であつた。道真は東宮に侍して、頻りに詩を賦している。「菅家文草」巻五の（寛平）七年暮春二十六日、予、東宮に侍りしとき、令有<sup>おほせ</sup>りて曰はく、聞くらなく大唐に一日百首に応<sup>こた</sup>ふるの詩有りと、今試みに汝一時を以て十首の作に応へよ」云々という東宮の令で作つた詩（391-400）や「東宮寓直の次、令を下して曰はく、去春十首既に急捷なるを知る、今當時の二十物を取りて重ねて要む」との命で作つた詩（401-417）あるいは「東宮」で賦したという詩（418）、「応令」によるという詩（426）など、東宮関係の詩が見える。また昌泰三年家集を献じているが、その奏状に「陛下始御東宮有令求臣讚州客中之詩」とあつて、皇太子も積極的に道真に詩を求めており、作詩の実力では菅根は道真に及ばないので、自然と、詩は道真に委ねて、専ら経史の方面に意を用いたのであろう。経史は「経史百家畢く諗<sup>こと</sup>ぬ」と称されて菅根の得意の分野であつた。

## 6 昇進の遅滞

対策及第の後、今に七箇年なり。之を前例に准ずれば、晩成と為すと謂ふ。況や年は四十三、多く等輩に後れたるをや。

前例に比して昇進が遅れているという。では前例は対策及第の後、何年で昇叙するのであろうか。菅根の前後の例をまとめたのが〔表

表 I

	文章生及第年	A	対策及第年	B	従五位下
都 良香	860	9	869	4	873
菅原 道真	862	8	870	4	874
三善 清行	873	10	883	4	887
小野 美材			892	5	897
藤原 菅根	<b>884</b>	<b>6</b>	<b>890</b>	<b>7</b>	<b>897</b>
平 篤行	893	5	898	5	903
紀 淑望	896	5	901	5	906

※ A—文章生及第から対策及第までに要した年数

B—対策及第から叙位までに要した年数

表 II

	叙従五下の年	年令	任参議の年	年令
源 湛	863	19	893	49
藤原 保則	866	42	892	68
藤原 高藤	868	31	894	57
藤原 清経	869	24	900	55
平 惟範	874	20	902	48
菅原 道真	874	30	893	49
源 昇	875	17	895	37
藤原 有穂	877	40	893	56
源 當時	882	15	911	44
源 希	884	36	895	47
三善 清行	887	43	917	74
藤原 興範	887	42	911	66
紀 長谷雄	888	43	902	57
藤原 定方	896	22	909	35
藤原 道明	897	42	909	54
橘 澄清	897	37	913	53
藤原 菅根	<b>897</b>	<b>42<sup>43</sup></b>	<b>908</b>	<b>53<sup>54</sup></b>
藤原 清貫	898	32	910	44
藤原 邦基	898	25	921	48

例外

安部寛磨 808 (52才)

三原春上 820 (47才)

「I」である。「公卿補任」「古今集目錄」で及第の年の判明する者を挙げた。菅根の「前例」となる四人のうち、三人は四年、一人は五年であり、菅根の後の例も五年である。菅根の七年は確かに遅れていると言つてよい。

「況年四十三、多後等輩」については、「等輩」をどの程度に見るかでやや異つてこようが、試みに、「公卿補任」によつて、参議となつ

た時の年令と、その人が従五位下に叙せられた時の年令とを表にしたのが(表II)である。参議まで昇つた者で、従五位下の年令が四十三歳というのは最も高令に属する。参議になりうるぎりぎりの線がこの(四十三)であるということになる(平城朝以降、菅根までに二名の例外がある)。清行、保則、興範の如くに六十、七十を過ぎて参議に任じた者でさえも従五位下は、四十二、四十三歳である。菅根の四十

三歳は、将来参議となりうるかどうかの瀬戸際だったのである。国史関係のことにも知識のあった菅根が、この「四十三」という数字を知っていたなら、醍醐天皇即位は願ってもない僥幸と感じたであろうし、道真の奏状にかかる期待も並々でなかったと想像される。

仮りに、同年令の藤原道明と菅根とを比較すると、参議の年令は同じ、五位では道明が一歳若い。ほぼ同じ速度といえる。ところが、家柄では、道明の父は相模介従五位下、菅根は右兵衛督従四位上。共に長子。道明は寛平二年文章生及第、菅根は同年对策及第である。出自・才学共に菅根が優れている。が、叙爵等は同時である。実質的には菅根が遅れたといえる。

以上要するに、奏状に言う、昇進の遅延は事実であり、当然にもっと早く従五位下に叙せられてよい。その資格は備わっていたと考えられる。道真の奏状もそれ故に、一階を超えて従五位上を請うたのである。

さて、道真が菅根の為に奏状を書いたこと理由について。第一には、道真に替って執経を勤めたので、道真は菅根の期待に応じて書いたと推量される。しかしながら、道真の東宮権大夫(七月三日まで)という身分も軽視すべきではない。「考課令」によれば、「内外、文武官、初位以上、毎年當司、長官、考其属官」とあって、通常の考課の場合は長官が部下を考課するのである。従って東宮坊官の場合は、大夫が考課するのであろう。寛平九年七月の場合は臨時の叙位であるが、菅根の上司たる、東宮権大夫道真が申請して初めて「考

課令」に準じた形式になる。その点にも、道真に拠って書かれた意味があるのであろう。

以上述べてきた如く、道真の推挙で東宮侍読となり、また従五位上の請状をも得ており、更には菅家廊下の門生でもあったとすれば、菅根の道真に対する恩義は並々でないといえよう。にもかかわらず、道真左遷事件では、菅根は時平に協力して、左遷を容易にした。いかなる事情でそうなったのか、次章はそのことを考える。

### 三

#### 1 文章博士

道真事件そのことを見る前に、昌泰年間の菅根の足跡をたどっておこう。この時期は菅根が儒者として頭角を露わし、やがて文章博士に任ぜられる、儒者菅根にとってはやや得意の時期である。そのことが、対道真の関係にも微妙に影響するようである。

醍醐天皇の即位は、東宮時代に侍読であった菅根には、何か将来への期待を抱かせるものがあつたであろう。即位に伴う叙位に於る昇叙は、道真の奏状も効なく従五位下であつたとはいえ、慶事にはちがいない。

官も、寛平九(897)年七月十七日、大藏善行の後任として勘解由次官に任ぜられたが、同月二十六日には早くも式部少輔に遷った(公・古)。式部少輔は「儒中之重職也」(職原鈔)と言われる官である。こ

の時の式部卿は、本康親王<sup>(31)</sup>、大輔は紀長谷雄<sup>(32)</sup>、大丞は不詳、少丞(定員二人)は藤原清貫<sup>(33)</sup>である。菅根の少輔は長谷雄の後任である。長谷雄の前任者は道真である<sup>(34)</sup>。このことから、菅根の儒者としての評価がかなり高かったことが知られる。

儒官としての評価が定まると共に、位階の面でも遅れを回復することがあった。寛平九年十一月二十日、大嘗会が行われ、二十三日叙位儀があり、菅根は従五位上に叙せられた<sup>(35)</sup>。一年のうちに二度の昇叙で、菅根のためには慶ばしい御代替りとなった。

昌泰二<sup>(89)</sup>年二月十一日文章博士に補せられた(公・古)。四十五歳。藤原氏としては任年の知られる最初の例であるという<sup>(36)</sup>。

この時期の文人社会は道真事件の予感もあって緊張した状況にあった。道真を中心とする「詩人派」<sup>(37)</sup>と撰閲家と組んだ形の「学儒派」が鋭く対立していた。その対立の中で文章博士となった菅根の立場はどのようなものだろうか。

菅根の資質を「詩人」と「学儒」という観点から評価すれば、「学儒」というべきであろう。先にも引いた「三代実録」の記事や、東宮侍読における道真との経・詩分掌の形跡などからもそれと察せられるが、当時の「詩人派」からはその仲間とは見られていないようである。

紀長谷雄は道真が詩人として許した数少ない一人だが、長谷雄は「延喜已後詩序」<sup>(38)</sup>で、「昌泰の末に至りて菅丞相罪を得て左遷し、文を知るの士、當時遺れる無し。適々内史野大夫(美材)有り。興を託

すること幽ならずと云ふと雖ども、早く成ること稍々過ぎたり。予深く之を嘉みす。延喜二年、忽ち異物に化しぬ。丞相遷所に在まして遙に内史を哭し、兼て文章の已に絶えしを歎く。其の一句に云く、紀相公独り劇務に煩ふ。自餘の時輩は盡く鴻儒なりと。後幾何も無くして、丞相も次で薨じぬ。朝に在るの儒者、寔に繁く徒有り、咸く王何の輩に列し、潘謝の流を習はず。取捨同じからず、是非各おの異なり。彼れ豈に愛憎の爲めにして然らんや。誠に文体の趣を知らざる也」と言う。長谷雄は、在朝の儒者は皆「王何之輩」<sup>(39)</sup>だという。「王何之輩」とは、王弼・何晏の類、即ち学儒をいう。長谷雄は延喜十二年没だから、延喜八年没の菅根はこの詩序が書かれた時には既に没していたかもしれないが、数年の差は今問題にならない。式部大輔(延喜三年菅根はまさに在朝の儒者である。道真が皮肉をこめて「自餘の時輩は盡く鴻儒」という、その中にやはり、元文章博士で権左中弁(延喜二年当時)の菅根も含まれるであろう。菅根が当時「学儒」と見做されていたことはほぼ間違いないであろう。

菅根の資質が学儒的であったとすれば、「詩人派」と「学儒派」の対立の中では、学儒派は文章博士菅根を自陣に取り込もうとするであろう。文章博士として個人の意志だけでは動きにくいところに、菅根は来てしまっていたのであろう。

昌泰年間、政治的には、時平側からの道真に対する反撥が日に日に烈しくなり、反撥は宇多上皇にも及んでいた。上皇は昌泰元年十月、道真ら旧朝の近臣多数を従えて、吉野の宮瀧に御幸した。この

大規模な御幸に対し、京に残った人々の批難があった。批難は帰京した日、道真の耳にも達している。「扶桑略記」所引の御幸記(道真記)には「嗟呼、人の意は同じからず。譬ふれば猶ほ其の面のごとし。相ひ従ふ者は実を見て以て頌歎を為す。相ひ従はざる者は虚を聞きて以て誹謗を為す。世の常なり。恠しむべからず」(原漢文)という。ここにいう「誹謗」は「頌歎」と対になっているので、道真に対してではなく、御幸そのこと、つまりは上皇に対してなされているのである。この一事にも知れる通り、官人は、宮廷派(時平派)と上皇派とで反目し、誹謗は上皇その人にまで及んでいたのである。

上皇側近グループと宮廷派官人という見方をした場合、菅根は明らかに天皇の側である。東宮時代からの勤仕——とりわけそれが侍読という精神的なものを含むものであり、皇太子が八歳の幼少の時から十三歳になるまで昼夜に恪勤して教育にあたったのであれば、そしてまた、新帝になってやや官位に恵まれたとすれば、天皇を支持する心は甚だ強かつたであろう。昌泰二年五月十五日からは、十五歳になった天皇に「史記」の進講も始まった(紀略)。

詩人道真と学儒たちの対立、上皇グループと時平たち新朝派の対立、それらの対立の中で、しだいに道真と菅根の間は疎くなってゆくのであろう。

## 2 藏人頭

昌泰三(900)年正月二十九日、在原友子が参議に任ぜられた後を襲つ

て、菅根は藏人頭となった(公・古)。醍醐朝は他の時代と異って、頭は一人である。この時の菅根の官は式部少輔であるが、式部少輔が頭に任ぜられた前例は、「職事補任」によれば、仁明朝の藤原衡、小野篁、文徳朝の南淵年名、宇多朝の菅原道真の四人のみで、菅根以降は例が無い。菅根の頭補任は異例に属することである。この異例の人事を例に近づけようとしたのが、同年五月十五日の右少将(左——古今集目錄)兼任であろう(公)。式部少輔が少将を兼ねることもまた異例なのであるが、このような無理をしてまで、菅根を頭に補したのは何故であろうか。そのことを考える前に、今少し菅根の身辺の変化を記しておこう。

式部少輔藏人頭に右少将を兼ねて、もはや昌泰二年五月から始めていた「史記」の進講は中断せざるをえず、三年六月十三日、三善清行と交替した(紀略)。そして、五月十五日既に文章博士も停止されていた(古)。(40)

文章博士を辞し、「史記」進講を交替してまで異例の藏人頭に補せられた訳だが、昌泰三年も半ばになると、道真の孤立はいよいよ救い難いものとなっていた。この間のことは諸書に詳しいので省く。ともかく、道真の追放が既に予想される時期に菅根は藏人頭となったのである。

時平はこの時、藏人所別当を兼ねていた。藏人所別当は寛平九年七月に始めて置かれ、時平がその初代別当である。(41)つまり、頭菅根の上に別當時平がいたのである。左遷のことを目前にして(左遷は昌

泰四年一月、頭の人選に時平の意向が加わらないはずはなく、時平が政変における頭の役割を考えないで人を選ぶはずもない。とすれば、時平は既に道真追放を決意し、藏人頭菅根の得失を計算した上で、異例の人事となったと考えるべきであろう。

ところで、昌泰三年二月六日、道真是「請罷右近衛大将状」を奉っている。その返表使を菅根が勤めている（重請罷右近衛大将状）。このような場合の使は、その者と何らかの繋りのある者が使となるのが普通である。これまでの道真との間柄を見れば、使となるにふさわしい。しだいに疎遠になりつつあったであろうとは思いますが、決定的に反目するという事態は、菅根が政治の中枢に居ない以上は、ありえないことでもあろう。

### 3 道真左降

昌泰四（91）年正月二十五日道真是大宰権帥に左降された。菅根がこの事件で果たした役割は、左降を停止すべく参内した宇多法皇の仰せを伝奏しなかったことにある。為に翌二十六日菅根は大宰大貳に貶せられた。

右のことは「公卿補任」延喜八年尻付に「同四正廿六左貶太宰大貳」今日止頭」とあり、「古今和歌集目錄」所引の藏人補任には「延喜元年右丞相左遷事、亭子法皇有御内裏而不奏事由」、仍正月廿五日左貶太宰小貳、去頭」とある。「大貳」「小貳」<sup>(少)</sup>「廿六」「廿五」の違いはあるが、菅根が左貶されたことは事実である。然れば、そ

の理由の法皇の仰せを伝奏しなかったというのもおそらく事実であろう。藏人頭としての職務怠慢を形式的には咎められたのである。しかし、二十七日には昇殿を許され、二月十九日には式部少輔に復し、二月二十一日には藏人頭にも復して、<sup>(42)</sup>法皇の体面を保つための形式的処分であった。

何故に菅根が法皇の言葉を天皇に奏上しなかったか。「北野縁起」等に拠った「百人一首一夕語」の話は冒頭に紹介したが、縁起等のおそらくは本になったかと思われる「江談抄」<sup>(43)</sup>の話に引こう（水は「水言抄」）。

又被命云、菅根与菅家不快、菅家令坐事之曰、寛平上皇為申停止此事、令参、菅根不通仰、<sup>(御水)</sup>皆以遏絶之云々、是菅根計也、

「仰ごとを通ぜず、皆以て遏絶す」法皇の仰せを、皆押し留めて奏上しなかった、というのである。「水言抄」によれば「御旨」を通じてとなるが、意は同じである。

「江談抄」にはまた次のような話もある。

菅根無止者也、雖然殿上庚申夜、天神二類ヲ被<sub>レ</sub>打也云々縁起類では仰せを奏上しなかった理由とされている話である。「江談抄」（類従本）は右の二話は並んで収められているが、「水言抄」（醍醐寺本）には後者の話はない。元来は別々の所にあったものが、後に同人の話ということで一箇所に集まったものであろう。道真に頬を打たれたという話は、面白きに過ぎて信を置きかねる。「是菅根計也」

などと共に説話化されたものであろう。

「江談抄」は大江匡房(四三)の談話を筆録したものであるから、十一世紀後半には既に、菅根と菅公は仲が悪かったとされていたのであるが、見てきた如く、事件以前には、計略をめぐらして陥められるほど「不快」の仲ではない。天神説話では菅根の死をも「新たに蹴殺されにけり」とまで言うが、それらは天神説話に関わることで、当面の菅根の問題からは外れる。ここでは、菅根が法皇と天皇の間を遮断したというのが事実らしいということを確かめればよい。

ところで、二十五日の法皇参内のことを伝える資料に「扶桑略記」<sup>(44)</sup>がある。

廿五日、(中略)同日宇多法皇馳参内裏、然左右諸陣警固不通、仍法皇敷草座於陣頭侍従所西門、向<sup>レ</sup>北終日御庭、左大弁紀朝臣長谷雄、侍<sup>二</sup>門前陣<sup>一</sup>、火長以上不<sup>レ</sup>下<sup>下カ</sup>楊座、晚景法皇還御本院、

「江談抄」と通ずる所もあり、長谷雄は菅根の異伝かとする考えもあるが、「江談抄」と「扶桑略記」とでは内容は全く別のことである。「江談抄」は法皇の仰言を握りつぶして天皇に奏上しなかったというのであり、「扶桑略記」は法皇が侍従所の西門で阻止され、門前には紀長谷雄が侍していたというのである。

法皇の仰せをとりつぐのは藏人頭の職掌に関わることであり、それ故に二十六日には頭としての怠慢を責められたのである。しかし、

長谷雄の場合はそうではない。それまでの法皇とのやや近しい関係で門前に侍していたのである。侍従所西門といえ、建礼門あるいは修明門の外側あたりに法皇はいたのであろう。おそらく門は近衛府が固め、法皇の周辺には衛門府の兵士が警備にあたり、検非違使配下の火長も動員されている。長谷雄の官は「左大弁式部大輔兼文章博士」なのであり、「警固して通さず」という諸陣の兵士とは命令系統が全く異なる。長谷雄は警固の指揮をとっているのではなく、文字通り法皇に「侍」しているのである。

思うに、長谷雄のこの行為は、大事の最中でのことであり、「終日」侍していたとすれば、必ずや時平の許諾あつてのことであらう。というより、時平の命令に依るのであろう。時平は、法皇のなだめ役を長谷雄に割り振ったのではなからうか。長谷雄は、法皇の解陣の要求には命令系統が異なることを理由に言を左右にして応ぜず、法皇に對し、もはや道真の左遷は停止することのできない事態であることを説いては、法皇の輕拳を諫めたものであろう。

右のことは、長谷雄の道真に對する裏切りとか忘恩とか言うべき性質のことではない。道真の左遷は一方的に決定されたものであつて、力と力の対決の結果、敗れて左遷というのではない。対決の結果であれば、長谷雄らも一方を選んで加担することもある。もしそうして時平に組したのであれば、忘恩と言つていいえないこともない。しかし、左遷は既に宣旨も下っているものであり、長谷雄らに選択の余地はない。護送使となつた藤原真興(菅根の弟)の如く「權帥の

前に下馬して涙を零す」(扶桑略記)のが精一杯のことであろう。

菅根も、長谷雄とやや似た立場にあったのだが、これは長谷雄よりも積極的に動いたのではないかと思う。おそらくは前述の如き事情で、菅根と道真は疎遠になりつつあった。そして藏人頭となった時、完全に時平の構想の中に組み込まれたのであろう。時平の最も恐れたこと、道真追放が失敗する唯一の可能性は、若い天皇が——しかも孝心篤い天皇が、法皇の言葉に動揺して、時平の計画を狂わすことであつたと思う。天皇に動揺を与えないこと、それが菅根に課せられた役割であろう。法皇の声を藏人頭の許で遮断し、天皇の心を安定させるには、東宮時代侍読を勤めた菅根が最も適任と時平は考えたのであろう。藏人所全体は別当の時平が掌握していれば、頭はむしろ政治的野心の少い、菅根のような「篤学」「無私」の学者の方が時平にも好都合であろう。時平は菅根に対し、法皇・道真派に皇位篡奪計画があるといつて協力を求めたのであろう。菅根にその言の真偽は確信できなくとも、天皇を失う危険があるとなれば、法皇の仰言を握りつぶすことは容易に決心できることであり、天皇を隠謀から護るという意識はあつても、ことさら時平に追従するという気持は薄かつたであらう。

時平にとつても、縁起説話が言うほど有力な協力者ではあるまい。左遷の翌日、源光、藤原定国はそれぞれ右大臣、右大将と道真の官を襲ったが、それに比して、形式的とはいへ菅根は左遷された。そのまま藏人頭であれば、例に従つて延喜二、三年には参議のはずで

ある。それが、左遷の為に八年まで遅延した。たしかに、菅根は時平に協力したが、それは共謀というより、むしろ時平にうまく利用されたというべきかもしれない。菅根にも功利的判断はあつたであらうし、時平とも何か将来の約束があつたのかもしれないが、師弟であつたことや、推挙のことをあまりに強調して、菅根の行為を卑しとするのは、当時の実情からはやや外れるであらう。

当時の師弟関係のあり方は必ずしも明らかであるとはいひ難く、従つて、師弟の倫理的拘束力も十分には明らかではない。当時の文人社会には分派抗争が激しく、仲間意識も敵対意識も強いとされる。道真の詩文にはその例も少なくない。しかし一方では、「門人に至りては唯だ益を請ひ業を受けたるのみ」<sup>(46)</sup>という清行の言もあり、道真の詩にも前引の「三千門下独り留守すらくのみ」<sup>(45)</sup>や「諸生の旧儒を怨む」<sup>(49)</sup>という言葉辞があり、益を求めて菅家廊下に集まり、道真が都を離れば、益を求めて去る多数の門下がいたこともまた明らかである。であれば、それらを含めて、詩人における師弟や派閥のあり方を検討しなければならぬのであろうが、今は菅根の立場から道真との関係を見ることで、一つの文人の交游のあり方を窺おうと試みた。

## 注

- 1 西沢道寛訳注岩波文庫本 二七頁
- 2 所功「菅原道真の配流」(『菅原道真と太宰府天満宮上』昭50所収)は「道真のおかげで天皇に近侍し出世するチャンスをつかみながら、恩を仇で返す



やうなことをしたのである。あるいは藏人頭兼左近衛少将としての役職上やむなく執った措置かもしれないが」と述べる。後半は菅根に即した新しい見方である。

### 3 岩波文庫本 菅原道真の項 二〇〇頁

#### 4 「北野縁起」「荏柄天神縁記」(群書類従所収)などとは、同文である。

5 後引の奏状による。「古今和歌集目錄」「日本紀略」の卒時の年令からの逆算でも同じ。但し、「公卿補任」では四十二歳になる。

6 岩波古典大系『菅家文草菅家後集』五七二頁 訓は私に施した。

7 「公卿補任」の「御即位前坊亮」などの注記でも知りうるが、「吏部主記」天慶九年四月二十八日条(『史料拾遺第三卷』九九頁)の「其叙位次、坊官皆加階」などは参考になろう。

8 (公)は「公卿補任」尻付による。また(古)は「古今集目錄」による。

9 「請重蒙天裁弁定大内記紀奇名称有病累瑕瑾所難学生大江時棟奉試詩狀」(『本朝文粹』巻七)

10 この試及び十名の及第者のことについては、後藤昭雄「学生の字について」(国語国文薩摩路 16号 昭47年1月)が詳しい。

11 「改訂史籍集覽」第十八冊 三四八頁 日付は寛平二年八月五日。

12 太田亮「姓氏家系大辞典」参照

13 「本朝書籍目錄」には「承和六年私記」が菅野高年の撰著として見える。六年は十年の誤であろうという(『本朝書籍目錄考証』)。

14 「和国本紀」巻一(新訂増補国史大系本 一七頁)

15 この他にも「官曹事類目錄」(佚書)や格式の編纂にも参与している(和田英松「本朝書籍目錄考証」)。

16 「令知古事者散位正六位上菅野朝臣高年於内史局始読日本紀」とある。

17 「式」は延喜五年八月撰進、「格」は七年十一月撰進された。

18 「菅家文草菅家後集」解説 八七頁

19 注10後藤論文参照

20 桃裕行「上代学制の研究」一六三頁、氏族家系別系図参照

21 古典大系の作品番号。以下同じ。

22 作品番号82・87・126・241など。

23 注10後藤論文

24 「古今集目錄」は元慶八年五月二十八日任とするが、注11の施入帳でも寛平二年八月因幡掾在任であり、元慶八年(884)から寛平二年(890)まで任にあることはないであろうから、今は「公卿補任」によった。

25 注20「上代学制の研究」二七四頁

26 「公卿補任」延喜二年尻付

27 寛平元年七月十四日「大丞藤原」とある(政事要略巻六九)。寛平三年七月二十一日藤原春海が在任(類聚符宣抄)、春海は寛平元年正月には少外記在任である(紀略)。二年春は春海が大丞であろうか。

28 「東宮職員令」には「学士二人掌執経奉説」とあり、道真は「兼供執経」と命ぜられている。学士に準じた扱いであろう。

29 「故」は「如故昇殿」などの故と同じ。なお「分脈」には「藏」の注があり、あたかも宇多朝の藏人であったかの如くであるが、侍読以前に六位になった形跡はなく、六年正月大内記(六位相当官)に転じた前後に六位になったと推定され、東宮侍読にして内裏藏人のはずはなく、結局「六位藏人」にはなっていない。但し、文章生・学生の頃、藏人所に候したこともあるかもしれないが、これは「藏人」とはいわない。

30 「新訂増補国史大系令義解」による。

31 寛平八年閏正月六日在任(扶桑略記)、延喜元年十二月十四日式部卿本康親王薨(紀略)。

32・33・34 「公卿補任」尻付

35 (公)(古)による。但し「古今集目錄」所引の「藏人補任」は昌泰三年とするが、昌泰二年五月十一日の「類聚符宣抄」にも従五位上とあって、寛平九年が正しい。

36 「上代学制の研究」三二六頁

37 後藤昭雄「文人相軽」(日本文学一九七三年九月号)が詳しい。

38 また大曾根章介「菅原道真」(同上)。

39 柿村重松「本朝文粹注釈」による。この詩序の詳注に後藤昭雄「紀長谷雄延喜已後詩序私注」(静岡大教育学部研究報告25・26号)がある。

40 注37後藤論文

41 清行と交替せしむる由の宣旨には「前文章博士」とある(類聚符宣抄)。「官

職秘抄」「本朝文粹」(巻六の匡衡の奏状)が、少将にして博士を兼ねた例として菅根を挙げているのは誤認である。

41 所京子「所の成立と展開」(『論集日本歴史3平安王朝』所収・有精堂)渡辺直彦「藏人所別当について」(日本歴史一九七〇年六月号)

42 (公)による。(古)は三年十月とするが、「西宮記」等により(公)が正しい。

43 「群書類従」(群書類従完成会)による。「水言抄」は古典保存会本による。

44 「新訂増補国史大系」による。

45 大曾根章介「兼明親王の生涯と文学(上)」(国語と国文学昭37年1月)は同族の誼と自己の栄達のために荷担したとし、「卑劣」な行動だが、同情の余地はあるという。

46 「奉左丞相書」(本朝文粹巻七)但し、文脈上は、道真と共謀していたのではないことを言おうとしている箇所、やや意味はずれる。